

---

lie

紅月

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

lie

### 【Nコード】

N1411K

### 【作者名】

紅月

### 【あらすじ】

男は女を愛していた、女も男を愛していた。2人で生きられる場所を探し歩きながら、嘘ばかり吐いて、ありもしない樂園を求めた2人の、その事実だけは本当だった。

「ねえ、貴方嘘を吐いてるでしょ」

ランプの橙色の明かりが、小さな室内をぼんやりと照らしだしている。淡い光が、質素な造りの、必要最低限しか置いていない家具の輪郭を浮かび上がらせていた。

小さな部屋に、2人の男女が、影を落としていた。

女はラフな普段着を身にまとっている。寒いのか、コートを着込んでいた。絹のような薄茶色の髪に、切れ長の髪と同じ色の瞳。紅く薄い唇が印象的な女性だ。ソファにもたれかかって、デスクワークをしている男を見つめていた。静かに静かに、邪魔だけはしないように。

喪服のような真黒なスーツを着た、染めたばかりの茶色い髪をした男は、パソコンの画面を見ながらキーボードを叩いている。静かな部屋に、カタカタというタイピングの音だけが響いている。そんな男に、珍しく女が声をかけた。女が見る限り、いつも無表情な顔が歪んだと思ったら、その手を、ふと止めた。

「何のことだい？」

「あら、知らないふりかしら」

「君の言葉が足りないんだよ」

女は机の上に置いてあった、空のグラスを持って器用にくるくると回した。薄茶の目を細めて、きれいに微笑む。

「私は嘘なんて聞きたくないわ。それが悲しい嘘でも優しい嘘でも、

嘘は嘘に変わらないもの」

その嘘が、女の心を寂しくさせているということを男は知らない。理解もし得ないだろう。今も、これから、ずっと。

男は女を愛していた。

それだけの事実は確かだった。

「ねえ、貴方はココが息苦しくないの？」

男が逃げ込んだ小さな、小さな廃屋。電気類はそこらへんから盗んで使っている。ぼろぼろになった壁は、今にも崩れそうで、ときどき隙間風が寒い。女は訊いた。この狭い部屋が、息苦しくないか。逃げ続けるその足取りが、だんだんと重くなってきたことを女は知っていた。

「苦しい、と言ったらキミは助けてくれるのか？」

女は悠然と、微笑んだ。赤い唇を、ゆつくりと開く。そして細く、白い手がコートの中にのびる。その小さな手には、鉄の塊が握られていた。鈍色に輝く、一丁の拳銃の銃口を男の脳天に照準を合わせる。

「ええ、助けてあげるわ」

男は疲れ切った顔に、わずかな笑みを浮かべた。まるでそれを救いとしているかのように、嬉しさを滲ませて、その答えを待っていた。それでも言うように。女を咎めもせず、愛おしげに見やっていた。それに対して、女はその顔を一瞬、苦渋に歪めた。幼さを残したような顔に不似合いなその表情は、本当に一瞬のことだった。男

はそれに気づいているのか気づいていないのか、微笑んだままだ。

「私、貴方が苦しんでいるところは見たくないの」

凜とした声が、廃屋に響く。女はゆつくりと、銃口を下げた。安全装置を力チリ、とはずして、手に持ったまま男を見る。

男は嘘を吐いていた。女を苦しませないための、嘘。助けるための嘘を吐いた。

女はそれを知っていた。自分が身売りの危険に晒されているということを。男はそれから救うために、富という名の樂園から遠ざかっているということを。そのパソコンのデータの中を見た女は全てを把握していた。女は嘘を吐いていた。

男もそれを知っていた。男は女を売ることを商売としていた。そんなことでもしなきゃ腐った世の中で生きてられなかった。一時の富を求めたら、もう戻れなくなってしまったのだ。そんなとき、この女とであつた。巨万の金を目の前に、男は商談を打ち切って彼女と逃げようとした。自分たちを知らない場所を求めて。だが相手が悪かった。

そいつらは、男を追っていた。何かのグループだったのだろう。夜毎、2人は息をひそめて眠る。見つからないように、殺されないように。

暫く沈黙が下りた。それを破ったのは、女の方だ。女は今までになかったほど、優しく微笑んだ。

「でもね、貴方を殺すこともできないわ」

だって好きだもの、と女は言う。居場所のない男にとって、女と

逃げ切るという希望だけが心の救いだった。しかし、もうその夢は追えないことが、どちらにもわかっていた。世界に、2人の見方は存在しなくなっただけからだ。もともと見方も少なかった、だから2人は心のどこかで諦めることを渴望していた。

「だからね、思ったの。これが一番良い方法なんじゃないかって」

女は男が静止しようとする暇もなく、その鈍色の凶器を米神に、空気を裂くような音が、部屋に轟いた。真つ赤な花を宙に咲かせて、女の華奢な体は傾いでソファに沈んだ。ごろん、と拳銃が古ぼけた床に落ちる。真白なソファはじわじわと赤が侵食していった。やがては床へ、男のもとまで。男はその光景をぼうつと見つめる。そして、女の元まで歩み寄った。

「これが、キミの答え？」

自分で笑えるぐらいに、情けない声で、返事が返ってこないことがわかっていながらも、問う。そのとき男は初めて理解した。

今まで女の為を思っただけ吐いていた嘘が、女にとってどれほど辛いものであったか。

男は茫然と、どこかやすらかな顔をしている女を見つめていた。女の、赤くなっただけ頬を撫でる。だんだんと、温度がなくなっていく様に男も目を瞑った。どこからか、あの銃声を聞いたのか『やつらの足音が聞こえてくる。』

「もう、大丈夫だね」

男は深紅の床に落ちたそれを手に取る。その顔に、これ以上ない至福の、しかしどこか悲しげな笑みを浮かべて、闇夜に、もうひとつ銃声が響いた。いつか女に言った、「大丈夫だよ、もう少しだから待っていて」なんて嘘を最期に思い出しながら。

嘘ばかり吐いてありもしない樂園を求めて、それでも、女と男が愛し合っていたという事実、それだけは2人の”ほんとう”だった。

黒ずくめの男たちは言葉を失った。彼らが見たものは、深紅の中に沈んだ、どこまでもやさらかな笑みを浮かべて死んでいる、重なった2人の体。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1411k/>

---

lie

2011年1月26日09時13分発行